異常兒の身體的特徵に就て（つゞき）

東京高師教授　醫學士　文學士　寺澤巖男

（三）耳殼。次には耳の畸形が少なくありませぬ。先日も私は、低能兒を收容して居る或學校の生徒に、此耳の畸形が少くないのを見出しました、それには色々あつて、下の耳たぶが、そげた樣に無いものもあり、全體として非常に形の小さいのもあり、耳殼の襞が明かならず從つて凸凹が殆んど無くて扁平に近いものもあり、普通のものよりも耳殼の襞の著しく卷き込めるものもあり、或は全體の形の圓形に近いものもあり、一方の端の著しく突出せる如きものもあり、又左右の耳の形の不相稱なるものなどもあつて、千差萬別と申してもよろしい程であります。

（四）下顎。低能兒などの中には、下顎が前方に突き出て居るものが御座いまする。

（五）齒牙。齒の發達の不充分なもの、齒列の不整なもの、上顎齒列と下顎齒列との著しく喰ひ違つて居るものなどがありまする。殊に例の有名な、ハッチンソン氏の齒とを持つて居るものも往々ありまする、ハッチンソン氏の齒と云ふのは遺傳黴毒を持つて居る子供に見受けられる特徵でありまして、門齒殊に上顎の門齒の下端が半月狀に凹んで居るのを云ふので、それのみでなくその下端に截痕があつたり、二つの門齒の間が相隔つて居たり、門齒の縱徑が短かつたりすることもあるのでありまする、又は遺傳黴毒の特徵でありまするが、遺傳黴毒の子供には低能や白痴が多いから、從て時には此種の齒が是等の兒童中に發見せらるゝことがあるのでありまする。

（六）其他の畸形。其他指趾の數の多きもの、或は指趾の癒著せるもの、或は指趾中の或ものが特に短きもの、顏の左右不相稱なるもの、脊髓披裂のあるもの、口蓋の畸形なるもの、猶其外にも身體の種々の部分に色々の畸形が伴ふことが少くありませぬ、然しそれ等の畸形其物だけからは、勿論低能兒であるかないかを直に結論することは出來ませぬ。

(七)循環器。低能兒は、血液の循環が旺盛ならず從て新陳代謝作用が低く手足などの冷たいものが多い樣でありまする。心臟の器質的疾患も比較的低能兒に多く、從て又脈搏の不整なるものも少くありませぬ。

(八)生殖器。低能兒の女子になると月經の不順なるものが少くありませぬ、卽ち或場合には月經が無かつたり、或は順調に來なかつたり、若しくは非常に後れ勝ちであると云ふやうなのが少くありませぬ、生殖器の發育不全卽ち陰莖或は子宮などの普通のよりも一層小さきもの、其他種々なる生殖器の畸形がございまする。

それから低能兒に現るゝ身體的伴隨現象とも云ひ得るが、しかしそれよりも寧ろ其子供をして見懸けの低能兒たらしむる主要なる原因となる所のものは、感覺器官或は呼吸器官等に來る缺陷でありまする。卽ち感覺器官と云ふのは主として視器及び聽器の缺陷であり、呼吸器官と云ふのは上氣道に來る種種の障碍、卽ち鼻腔に於ける慢性肥厚性鼻炎、鼻茸、又は咽頭に於ける腺樣增殖症、慢性扁桃腺肥大等でありまする。

(九)眼。視器の障碍としては近視亂視等がありまする。是等の障碍は、經驗修得の上に大なる障碍となる點より云つても又、物を注視しようとする際に起る異常の緊張努力等の爲に神經力を普通の人よりも使ひ過ぎると云ふ點から云つても、多少は其智的發達を障碍する原因となりまする。又眼球震盪症と云ふのがありまする。之は眼球が時々ピク〳〵と左右に動くのでありまするが、特に物を見詰めさせると其震顫が著しくあらはれるのを申しまする。之は近視亂視などの場合とは違つて、それが爲めに智能の發達を阻害して低能の觀を呈せしむる原因となると云ふよりも、私の今迄觀察した所によりますると、どうも神經過敏症の兒童或は、どこか神經系統に故障がある子供に此現象を見ることが少くないやうに思はれまする。其他斜視なども往々見受けまするが、之は低能兒ならざる者にも隨分ありまするから、低能兒とさまでの關係がないらしく思はれまする。然し此斜視も、どちらかと云へば何か他にも神經系統に障碍がある子供に比較的多い樣に思はれまする。

(十)聽覺。次に聽器の故障でありまするが　聾啞

又は難聽兒等が卽ち之に屬しまする、それ等の原因が何であるに拘はらず、是等は兒童の智能發達の上に大なる障碍となり、從つて彼等をして見懸けの低能兒たらしめることが少くありませぬ、然し又生來の低能兒にも、此缺陷が比較的多く伴つて居る樣に思はれまする。

（十一）上氣道に於ける疾患。鼻腔の疾病としての慢性肥厚性鼻炎とか、鼻茸とか、或は咽頭に於ける腺樣增殖症とかは、勿論低能兒の變質的特徵と見做すべきものではありませぬが、然し是等の疾患の著しい子供は、充分に鼻呼吸をなす事を防げられ、從て幾分中樞神經系統に於ける神經細胞の働きに不良なる影響を受け、之が爲めに多少智能の發達を防げらるゝと云ふことは、勿論有り得ることでありまする。又咽頭の兩側にある扁桃腺が、著しい慢性肥大を現して居るものを低能兒について見ることが私にも二三例ございました。此場合は其肥大の爲めに其子供が低能兒となつたと云ふのではありませなんだが、此慢性扁桃腺肥大も亦幾分其精神の發達を障碍して居つたやうに見受けました。

次に神經系統の障碍が外部に現れて、それが兒童の身體的特徵となつて居る場合も少くありませぬ。それは第一には運動神經の主裁して居る筋肉運動の上に現はれ、第二には感覺の上に現れてまゐりまする。第一の筋肉運動に現れる方から申しまするとそれが動作の上に、又種々の不自然なる運動に、或は運動麻痹の上に其他顏貌の表情に、又は言語運動の上等に現れてまゐりまする。次にそれを一つ々々申し述べて行きませう。

（十二）動作。低能兒の筋肉運動は、多くの場合敏活でない爲めに其動作、擧動が遲鈍であり、拙劣であることが、一見直ちに氣附かれる程でありまする、次には運動神經の調節作用と申しまするか協調作用と申しまするか、卽ち比較的細かな動作をするとき手足などの色々の筋肉が協同して働いて一つの目的を達する働きが、低能兒にはうまく出來ませぬ。從て其動作擧動が、甚だ不細工で見惡いのが常でありまする。之も此種類の子供が遊戯や手工などをしてゐる所を一寸見ても直ぐにわかる位でありまする。

（十三）不自然なる運動。次に運動神經の禁止作用が不充分であり、注意を或る一事に集注することが出來がたいので、絕えず手足などが不安に不自然に

動いてゐるのをよく見受けまする、手足或は其指などのみならず或は首とか眼球とか脣などが、絶えず定まる所なく不安な樣にフラ〳〵若しくはピク〳〵と動いてゐる樣なことが少なくありませぬ。或は手指などを延ばさせて見ますると震顫を起すこともありまする。又癲癇其他の場合に於けるが如く發作的痙攣となつて現はれることもありまする。

（十四）運動の麻痹又は不全。前のに反して運動神經の麻痹の爲めに片方の指とか手とかゞよく動かぬとか脚がよく動かぬとか云ふやうなのが少くありませぬ、昔から涎くりは馬鹿な子供の一つの特徴の樣に云はれて居りまするが、之は脣や頰などの運動が思ふやうに働かないが爲に、涎が流れるまゝになつて居ることが其主なる原因であると或人は申して居りまする、又膀胱括約筋の働きが緩いが爲めに、或は中樞神經から禁止作用が弱い爲めに、寢小便などが起りやすい。又運動神經に障碍があると共に、筋肉其物の發達も不良なる場合が多く、從つて此の二つの原因から握力などの甚だ弱いものが多くありまする。

（十五）表情。次には顏貌の表情でありまする。表情が甚だ乏しして鈍くそして適切でないことも、低能兒や白痴兒の一つの特徴でありまするが、之は一つは顏貌の表情筋を支配して居る運動神經の働きが活潑でないのにもよることは勿論でありまするが、又一つには運動神經を働かしむる源泉でありまする感情や知識の發動が鈍いのにもよるのであります。

（十六）言語運動。低能兒などの中には吃音其他言語運動に障碍があるものが少なくありませぬ。

（十七）第二に感覺に關しては皮膚感覺殊に痛覺の甚だ鈍いものがあり、或は嗅覺味覺などの鈍いものも少くありませぬ。聽覺視覺に關しては既に前に述べて置きました。

以上は、異常兒特に低能兒の身體的特徴に就て簡單に述べた次第でありまするが、勿論之だけでは少し不足でもあり、又述べ方も甚だ亂雜でございましたが、それは又他日補ふことゝ致しませう。

時代を動かすものは主義ではない個性だ。（ワイルド）